

英作文における文法と文体

北 村 正 司

(1)

よい英文はいろいろな特色の複合体であるが、そのうちでも文法的な正確さは重要な基礎的要素である。英文の正確性の習得方法には二つの径路がある。英語を母国語とする学生であれば、よい英文の多読によって、これを達成できる者もある。それは意識的に、あるいは潜在意識的に、英文を模倣する能力に秀でた学生であって、彼等は多読によって自然に英語の構造に対する感覚を養い、正しい効果的な文章を書く技術を身につけることができる。しかし、たとえばアメリカの大学においても、このような学生は少数であって、大多数は作文上達のために多くの指導を受ける必要があり、意識的に英文の構造を研究し、基本文型を把握し、その修飾と結合の方法を理解しなければならないのが実情のようである。Roberts は次のように言っている。

Furthermore, many people apparently can acquire a feeling for sentence structure only through some sort of conscious study of sentences. They get a feeling for speech sentences without study, as a result of being native speakers of the language. But a grasp of the somewhat more elaborate, somewhat more conventionalized sentences of writing, an ability to follow them out and get them onto the paper, often requires some conscious understanding of their forms and structures. One needs to know the basic patterns of English sentences and to perceive how these can be modified

and combined to produce normal English prose.⁽¹⁾

つまり、英語国民の場合でも多数の学生が英文の正確さを習得する普通の径路は文法の研究である。もちろん文法の研究だけでよい英文を書けるものではなく、読書によって文の感覚を養う必要があるが、文法の注意深い生きた研究は、優れた作家や文章家の用いる語法や具体的構造の把握を容易にし、また、作文の欠点の構造的修正や文体上の改善にも貢献する。こうした事情から、従来も多数の英作文の教科書や参考書が、文法に重点を置き学生の作文力の伸長を意図して来た。しかし、その多くは、立脚する文法が伝統的であって、新しい言語学から見れば科学性を欠き矛盾を含むものである。したがって、こうした文法を基準とする作文の原則にも批判の余地が生じて来る。それで言語学の進歩に則り、従来の英作文上の規則の過誤を改め、より健全で効果的な指導原則を確立することが必要である。次に主要な問題について考察してみよう。

(2)

構造言語学の発達にもかかわらず、伝統文法が英語教育に根強い大きな勢力を張っていることはいずれの国においても争われない事実である。伝統文法の術語の定義に関する矛盾について、Fries などの言語学者の激しい批判があり、その欠点も明らかにされているが、実際には、このような術語も、符牒的に特定の文法形態を指示することができるから、実用性を認めなければならない。英作文においては、いろいろな文法形態をどのように有効に用いるべきか、またこれに関連してどのような点に留意すべきかということが問題になるのであるから、立脚する文法理論は異なっても、応用段階において文法形態の機能について意味上の基準を持ち出すことがなければ、混乱を避け指導の効果をあげることができる。たとえば、単文 (simple sentence)

(1) Paul Roberts, *Understanding English*, pp. 142—143.

の用い方については、単文を多く用いて内容の空虚ないわゆる choppy sentence の連続にならないようにという警告が一般的であって、そのほかの制限はないから、実際的には無難である。この choppy style についても、言語学者の Sledd は効果が発生する場合があることを指摘し、次の文例を示している。⁽¹⁾

Then the two weeks were up. They prepared to break camp. The boy begged to remain and his cousin left him. He moved into the little hut with Sam Fathers. Each morning he watched Sam lower the pail of water into the crib. By the end of that week the dog was down. — William Faulkner.

この文は、書き改めようとすれば、各文の効果は弱められるだけであろう。しかし、こうした特例は、伝統主義者の方でも考慮されていることであって、choppy style のほか、いわゆる sentence fragment も、効果的に活用できることが看取されている。⁽²⁾

But now to resolve! And especially to keep in touch with life. With the sky, this moon, these cold candid peaks. — Katherine Mansfield.

ただし、上記の二つの文体は、Faulkner や Mansfield のような大家によって用いられる場合に例外的な名文が書かれるのであって、英作文の授業において奨励すべきものではないから、伝統主義者も言語学者もその使用に関し共に警告を発しているのであって、この段階ではいずれの指導法も大差がない。

しかし、同じ文の種類でも、重文 (compound sentence) と複文 (complex

(1) James Sledd, *A Short Introduction to English Grammar*, p. 280.

(2) Clarence Dewitt Thorpe and Carlton F. Wells, *College Composition*, p. 121.

sentence) の用法に関しては事情が異なっている。

伝統的な英作文の参考書は、重文の文体的価値に強い局限を加えることが多く、なかには高度の効用性を示現する場合は、次文のように全体の思想が二つ以上の平等な重要性を有する部分から成っている場合だけであると述べているものもある。⁽¹⁾

Today we are defeated; tomorrow we will rise again.

重文の有用性を上記のように限定するのは、この利点を除けば、単文や複文の方が重文よりも望ましい効果をあげることができると考えているからである。したがって、重文の代わりに複文を用いるように勧められる場合がひじょうに多い。その根拠として、複文においては、主節が主要な思想の強調を可能にし、従節が思想の従属関係を示すという理由が与えられる。この趣旨に基いて、英作文の参考書には次のような陳述を含んでいることが普通である。

In constructing sentences containing two or more elements of unequal rank, it is necessary to show by the construction which one is principal, which subordinate. The object of a writer should always be to convey his ideas with exactitude. Only the sloven or the bungler throws his ideas out in the gross, with nothing to indicate the fine shadings of meanings he has in mind. Precise relationships in thought within the sentence can be shown in no better way than through care in putting ideas of equal rank in coordinate constructions, main ideas in principal, secondary and modifying ideas in subordinate constructions.⁽²⁾

前述のように、この原則は、複文に関しては、主節と従節の関係が、思想間の主従関係を表わすという考え方が基礎になっているのであって、逆に言

(1) Eric M. Steel, *Readable Writing*, p. 295.

(2) Thorpe and Wells, *op. cit.*, p. 134.

えば、主要な考えは主節に、副次的な考えは従節に表現せよということである。こうした立場から文を改善しようとする場合にあげられる例は、次のようなものである。たとえば

He was injured in an accident and he had to give up his job.

においては、二つの観念の重要性は同等でないから、これを

(a) *After he was injured in an accident, he had to give up his job.*

(b) *As he was injured in an accident, he had to give up his job.*

のいずれかに書き改め、時または推理の関係を明らかにせよと言われる。⁽¹⁾また

I went home, and my family decided soon afterwards that I should attend a military camp for the rest of the summer.

を書きかえ、従属的な観念を修飾節に入れて、

Soon after I went home, my family decided that I should attend a military camp for the rest of the summer.

とすれば、文の強調が高まり、構造がしっかりすると指導される。⁽²⁾たしかに、以上の例では従属接続詞がいろいろな関係を明瞭にするから、読む者はその意味をはっきり把握することができる。しかし、主要な観念を主節に従属的な観念を従節にという原則は、種々の複文について検討すれば、妥当性が局限されていることがわかる。Sledd はこの問題に関し、伝統的な英作文の規則に痛烈な批判を下している。⁽³⁾

(1) Steel, *op. cit.*, p. 296.

(2) Thorpe and Wells, *op. cit.*, pp. 135—136.

(3) James Sledd, "Coordination (Faulty) and Subordination (Upside-Down)," *Readings in Applied English Linguistics* edited by Harold B. Allen, pp. 354—362.

重文にしても複文にしても、その名称は文法上の特殊の構造に与えられたもので、従節とは *as, if, when* などの接続詞で始まる節であって、意味上かならずしも主節に従属するものではない。これは、つとに Jespersen も指摘したことである。⁽¹⁾ たとえば、*It is true that he is very learned.* の主節に表わされた観念を、副詞に変え *Certainly he is very learned.* とすることが出来る。この事柄から見ても、また

I tell you that he is mad.

He is mad, as I tell you.

という二文の比較によっても、主要な観念がかならずしも主節に表現されるものでないことが明瞭である。

また、*I shall go to London (if I can).* や *(When he got back) he dined with his brother.* では、括弧内の従節を取り除いても、実質的な意味が著しく損ぜられることはないが、従節を取り除けば、残部は意味をなさないことがある。たとえば、*(Who steals my purse) steals trash.* のような場合である。さらに極端な場合は *(What surprises me) is (that he should get angry).* のような文で、二つの従節を取り去れば、残るのは *is* という語だけになる。この小さな語が主要な観念を含むとは言えない。

Kruisinga も、名詞節が主節より強調されている次のような文例を多数あげている。⁽²⁾

Then, too, it was generally discovered that the maker of these splendid books was himself a splendid old man.

The fact was that Yeobright's fame had spread to an awkward extent before he left home.

(1) Otto Jespersen, *The Philosophy of Grammar*, pp. 105—106.

(2) E. Kruisinga, *A Handbook of Present-Day English*, Part II, Vol. 3, pp. 367, 373, etc.

その上, Kruisinga は連続節 (continuative clause) について

The continuative clause (or adjunct) gives incidental information about the noun which is not subordinate to the rest of the sentence but of equal weight. The result is that a continuative clause, though syntactically part of a compound sentence, has the meaning of an independent sentence.⁽¹⁾

と述べている。Kruisinga は、いわゆる複文を compound sentence と呼んでいるが、上記の連続節の例としては、次のような文が示されている。⁽²⁾

Eustacia was indoors in the dining-room, which was really more like a kitchen, having a stone floor and a gaping chimney-corner.

この場合, which は「and+人称代名詞」とほとんど同価値であって、先行する節と同等の独立した意味を持っている。

連続節の独立的性格は次のような文の構造によって極めて明瞭に示される。

She was much attracted by the novels of Kingsley, between whose genius and his faults she drew a drastic contrast.⁽³⁾

"No, pa," I answered. After which I added, "What is dyspepsia, pa?"⁽⁴⁾

従節は文法上従属的な節であって、単一の名詞、形容詞、副詞と同じように用いられ、しばしば構造を拡大するために使われる。たとえば

The man is my uncle.

を拡大して

(2) *Ibid.*, p. 375.

(3) *Ibid.*, p. 376.

(3) *Ibid.*

(4) 大塚高信編「新英文法辞典」p. 279.

The man whom you met is my uncle.

とすることができるが、この場合 whom you met が man に従属しているのは

The big man is my uncle.

の big が man に従属しているのと同じである。しかし、論理的または心理的に、whom you met で表わされる事実が、話し手や聞き手に、最も重要な事実であることも可能である。また、そうであるからといって、この事実を主節に入れるべき理由は全然ないであろう。最も重要な事柄が従節によって極めて効果的に伝えられる場合⁽¹⁾もしばしばある。

紙巻煙草 Viceroy の広告文は次のようになっている。

Smoke all seven filter brands and you'll agree: some taste too strong... some too light... but Viceroy's got the taste that's right!

また広告面のトップにはキャッチフレーズとして "Viceroy's got the taste that's right!" と印刷されている。この文の that's right は従節であるが、そこに表現されていることは、広告主が最も強調したい事実であって、下線までほどこされているのである。これは語順上重要な終位 (end position) を用いて効果を狙ったものと解せられる。

従節が文法上従属的であるのと同様に、重文を成す等位節も文法的に等位なのであって、等位節に入れられた観念が、かならずしも意味上等位の観念ではない。したがって、等位の観念を常に重文で表現すべきであるという結論にもならない。

前述のように、主節と従節は、特定の構造に附与された名称であって、意味の角度から主従を決すべきものではない。Fries が従節に相当するものを

(1) Sledd, *A Short Introduction to English Grammar*, p. 276.

含み文 (included sentence) と呼ぶのも、こうした理由からと解せられる。したがって、英作文の参考書に示されている「最も重要な観念を主節に、重要性のすくないものを従節に表現せよ」という規則は、真理を伝えるものではない。英文を書く場合には、このように機械的に文を構成することができない多くの文体上の問題に直面するであろう。この際強調すべきことは、文は書き手の目的に最もふさわしいものでなければならず、適当な強調を伝えるためには、いろいろな構造からその場合に最も適するものを選ぶことである。上記のような伝統的な作文の規則の矛盾は、文法体系は形態の構造であって、文法範疇は形式によって決定しなければならぬという構造主義文法では除去され、英語の正しい実態の理解に基いて効果的な英作文の指導を行なうことができる。この意味において、従来の作文規則を全面的に、言語学の立場から検討することが必要である。

(3)

伝統主義的な従来の英作文参考書が与える作文原則の厳守が、実際に広く行なわれている語法との衝突を招き、文体上の問題を惹起する場合がある。たとえば、代名詞の用法に関して、次のような規則がある。

Do not use *this*, *that*, or *which* to refer vaguely to an idea implied or suggested but not clearly expressed in the preceding clause or sentence.⁽¹⁾

この原則のうち、関係代名詞 *which* については、その先行詞であるべき節が何であるかが明瞭でない場合は、*a fact which* のような表現を用いるか、さもなければ文を書き改めた方がよいと言われる。実際において、*a fact which* を用いた文はしばしば見受けられる。

Although our young people are spending more years in school

(1) John M. Kierzek, *The Macmillan Handbook of English*, p. 429.

than ever before, *a fact which* theoretically should delay marriage, the average age of bride and groom has been dropping steadily to the point where half of all men are married by 23 and half of all women by 20.—*Life*, Vol. 31, No. 9.

文を書き改めた方がよいというのは次のような場合である。

The fish are kept alive and fresh in glass tanks, and it also attracts people, which helps the business considerably.

この文では *it* と *which* の指すものが明瞭でないからこれを書き改めて

The fish are kept alive and fresh in glass tanks. The display of live fish helps business by attracting people to the place.

としなければならぬと⁽¹⁾言われる。

しかし、この規則にも例外があり、*which* の指すものが次のように明らかな場合には上記のような考慮はもちろん必要でない。

Father suggested that I keep the money, *which* I did without a protest.

以上が規則の大要である。⁽²⁾

そこでその限界が問題になる。学生の作文を上記の原則に照してどこまで訂正し、しかも文体の調和を止めるかという困難に教師が直面する場合がある。Hill が *Saturday Evening Post* から引用し言及している次の文はどう取扱うべきであらうか。⁽³⁾

The mail is all delivered by plane, *which* is not only remarkably

(1) *Ibid.*, p. 430.

(2) *Ibid.*, pp. 429—430.

(3) Archibald A. Hill, "Correctness and Style in English Composition," *Readings in Applied English Linguistics* edited by Harold B. Allen, p. 316.

efficient, but is the chief weekly excitement.

この文は関係代名詞 *which* の先行詞が明瞭でないという非難を受ける可能性がある。事実、私の調査した範囲内でも、ある有識の米人はどうしてもこの文を容認せず、全文を書き直すべきであると主張していた。また、原文を前記の参考書的な原則通りに、

The mail is all delivered by plane, a process which is not only remarkably efficient, but which furnishes the chief weekly excitement.

と書き改めた方がいいと言う米人もあった。しかし、この人は原文のままでも文意は明瞭であるという意見であったし、大半の米人には原文のままでも差支えないと思われる。Hill は漠然とした先行詞は、現代文では普通であるし、また英語のあらゆる時代において普通であったと述べ、上記の引用原文には全然曖昧なところがなく、*which* は正確であってもぎごちない書き直しを避ける便利な工夫と思われると言っている。英作文指導上文体と関連して考慮すべき事柄である。

集合名詞に呼応する動詞と代名詞は、集合名詞を1単位と見るか集合体をなす個々の個体に関心を持つかによって、単数にも複数にもなるが、英作文の参考書には、次のように、その選択はある構文内においては一貫して矛盾がないようにしなければならぬという規則がある。

Use either a singular or plural pronoun to refer to a collective noun, depending upon whether the noun designates the group as a whole or the members of the group. Be consistent. Your construction may be either singular or plural but not both.⁽¹⁾

In your choice of verbs and pronouns to go with collective nouns

(1) Kierzek, *op. cit.* p. 252.

you must depend on consistency as your guiding principle. Once you have spoken of a group as a single unit, you cannot, without some logical explanation, refer to it in the plural.⁽¹⁾

これは、たとえば

The team *is* now on the floor, taking *their* practice shots at the basket.

のような文は、数の一致を欠いているから、これを

The team *are* now on the floor, taking *their* practice shots at the basket.

としなければならぬという規則である。この規則に照合すると、次の文は正しくないことになる。

We might assume that Standard Oil *is* going to sponsor a new program. *They* will select a commentator with political views which coincide with *their* own.

つまり、Standard Oil は集合名詞として、一度単数に用いられ、次文において複数代名詞で受けているところに問題点があるわけであって、Hill によれば、アメリカの英語教員の討論においても、大多数はこれを誤りとみなしたそうである。私の調査したうち一人の native speaker もこれを悪文として一蹴し

We might assume that Standard Oil *is* going to sponsor a new program and will select a commentator with political views which coincide with those of the company's directors.

と書き改める必要を力説した。すなわち、二文に分れている原文を、一文に

(2) *Ibid.*, p. 242.

纏め最初の問題点を避け、their own を those of the company's directors として、呼応関係の矛盾をなくするように工夫したのであった。しかし、大半の米人は、原文のままでいいとし何等奇異の感じを抱かないようである。この文は Hill が提起したもので彼が言っているように、⁽¹⁾原文の They を It とすれば、文体的効果が異なり妙な感じを与える。また They を The board of directors of Standard Oil のように迂遠的に表現すれば、文体はぎごちなくなる。実際には原文のような用法は広く行なわれているのであって、一般の米人には、指摘されるまで問題点がどこにあるのかさえも意識できないのが実態と思われる。Hill はこの問題について

In the opinion of one person at least, illogical suppleness has always been one of the beauties of English.⁽²⁾

と言っている。事実、品位のある文章においても、集合名詞が同じ場所や文中で単複両様に用いられた例はすくなくない。Fries も次のような⁽³⁾例文をあげている。

Our club has frequently caught him tripping, at which times they never spare him.—Addison, Spectator, No. 105.

Each house shall keep a journal of its proceedings, and from time to time publish the same, excepting such parts as may in their judgment require secrecy.... —Constitution of the United States, Art. 1, Sec. 5, # 3.

また、この現象に関し Fries は次のように説明している。

Reference pronouns are usually separated from their antecedents by at least one other word and often they stand in the next sentence. As a result, in Modern English, they usually agree in

(1) Hill, *op. cit.*, p. 316.

(2) *Ibid.*

(3) Charles C. Fries, *American English Grammar*, p. 57.

their form with the number meaning which is in the attention of the writer rather than with the form of the antecedent. Thus with singular collectives and indefinite pronouns there is very frequently a plural reference pronoun.⁽¹⁾

以上の事柄を総合すれば、前記の問題の文には誤りがなく、かえって文体上の特色を発揮していると見るのが妥当と解せられる。Fries は文法上の語法の正しさについて、三項目から成る見解を示している。

1. The only basis for correctness in grammar must be usage, for the schools the usage of those who are carrying on the affairs of English-speaking people.

2. Where this usage is practically unanimous there is no appeal, but where it is divided no one form or construction is the sole correct one.

3. In cases of divided usage a reasonable guiding principle of decision would be to choose that form or construction which is in accord with the tendencies or patterns of English as these can be seen from the history of the language.⁽²⁾

この原則に照し合わせて見ても、合衆国の憲法にまで用いられている語法を否とするのは固陋というべきである。品位のある文にも用いられている一見矛盾の感を呈する上記の語法は、文法的にも文体的にも十分の理由があることを認めねばならない。

また文体の視点から検討されなければならない作文の規則の中に、文法構造の parallelism (並行体) の問題がある。たしかに並行体が適当に用いられた場合には、文体は明晰で雄勁なものとなる。たとえば次の文は、並行体を利用していないために、ごたごたした文になっている。

(1) *Ibid.*

(2) C. C. Fries, *Teaching of English*, pp. 43—44.

One of the causes of unrest throughout the world today is that people are dissatisfied with their leaders. Some also are angry because they are short of food, others are discouraged because the common man is still denied liberty.

上記の文は、世界不安には3つの原因があるということを指摘しようとしているのであるが、その3つの原因を同じ文法構造で表現すれば、効果を高めることができる。その一方法として、名詞句を用いれば下記の文のように改善することができる。⁽¹⁾

Three causes of unrest throughout the world today are people's *dissatisfaction* with their leaders, *resentment* of food shortages, *discouragement* at the continued denial of liberty to the common man.

一方、並行体は表現手段の固定、不自然に導き易いので、その濫用を戒めなければならない。このことを考慮して英作文の参考書が与える規則は次のようになっている。

Occasionally an attempt to produce complete parallelism in structure results in a stilted and artificial writing which some critics refer to as "schoolmarm" English. The student writer, however, will seldom be guilty of too much structure. Any rule which helps him to design and build good sentences is a good rule. The rule may be restated in this form: a noun should be followed by another noun, an infinitive by an infinitive, a phrase by a phrase, and a clause by a clause.⁽²⁾

すなわち、並行する考えは、名詞は名詞と、不定詞は不定詞と、句は句と、節は節と、接続詞によって、並行的に結びつけなければならぬという規則であって、その一例としては

(1) Steel, *op. cit.*, p. 300.

(2) Kierzek, *op. cit.*, p. 433.

I have learned better manners and how to make myself look better to others.

という文では、名詞と不定詞が並んでいるのが悪く、これを次のように二つの名詞が並列するように改めると効果が高められると言われる。⁽¹⁾

I have acquired better manners and the ability to make myself attractive.

たしかにこの規則によって文を改善できる場合もある。しかし、一流の作家の文章を見ると、次のようなこの規則に反する文がたやすく発見される。

If an earthquake happened while I was reading a book of philosophy, I should forget the book of philosophy and think only of the earthquake and how to avoid tumbling walls and chimneys.—
Robert Lynd.

また

She was a nice girl and very easy on the eyes.

のように、名詞と形容詞の並列の形になる文や、対照を示すものでは、同じように

He was a rugged athlete and yet gentle as a lamb when off the playing ground.

のような文が広く行なわれている。これを不可として書き改めようとするれば、かえって不自然な文を生ずるであろう。Roberts がこのような文例について

Study of reputable magazines and books will disclose others.

(1) *Ibid.*, p. 62.

and as a writer matures and deepens his acquaintance with the work of other writers he learns how to break the rules. In general one prefers an idiomatic sentence to a stilted one, and if a sentence comes easy and sounds right, one writes it, whatever the *and* connects. But one tries to be sure that it does sound right.⁽¹⁾

と述べているように、変化の中に統一を求めるのがよい文章の常であって、原則に反する構造もそれによって、かえって効果を発生し、また自然な文となる場合も多いことを見逃すべきではない。

伝統的な英作文指導の欠陥の一つは余りにも規範的な点にある。しかし、言語学的な指導は決して不当な自由主義を意味するものではない。その指導原則は、広く一般に行なわれている語法を調査して、便宜主義によらず事実を教えるところにある。権威を一般の参考書に求め、その与える原則によって、英作文の指導を行なうことは、最も手数のかからない方法であろう。しかし、言語の実体を調査し、またすくなくとも、そのような方針で発見された学者の業績を尊重して、信頼すべき基礎のもとに指導を行なうことが望ましい。

伝統的な英作文の参考書は、各国において依然として根強い勢力を持っている。またその取扱範囲が広汎で、有益な示唆を包蔵していることも事実である。しかし、言語学が進歩しつつある今日においては、新しい角度から、従来の作文の規則に検討を加え、修正すべき点は改善して、英語の実態の理解に基いたより効果的な指導を行なう必要がある。

(1) Roberts, *op. cit.*, pp. 229—230.

